

物理学会物性分科会の変更案 (その3)

年会・分科会検討ワーキンググループ*

年会・分科会検討ワーキンググループでは、物性分科会のあり方について、前回の提案に対して寄せられた会員からのご意見を取り入れて修正案を作成し、理事会に答申しました。

1. なぜ分科会を変えるのか

現在、物理学会の年会・分科会では、各分科ごとにプログラムの編成、シンポジウムあるいは特別講演の企画が行われています。時代とともに各分野での研究内容や研究者数は大きく変わっていますが、年会・分科会の枠組みは数十年の間基本的には変わっていません。このため、分科ごとの規模に極めて大きなアンバランスが生じているだけでなく、研究の進展に対して柔軟な対応が困難になっています。大きな分科では適切なプログラム編成が難しくなり、類似のセッションが4つ5つと並行して行われて参加者が走り回っていますが、小さな分科は半日ないし1日ですべてが終了しています。また、強相関係のように大きな流れを形成しているにもかかわらず、相互の調整が十分できないまま複数の分科にまたがって発表が行われている分野がある一方で、物理学会全体から見たときの意義を再検討する必要がある分科もある、という指摘もあります。

分科の部分的な改編でなく現在の制度そのものを変更して、研究の進展に柔軟に対応できる体制を整えない限り、このような問題はいつまでたっても解決に近づかないものと思われます。

一般講演の問題だけではありません。特別講演やシンポジウムなども基本的には各分科ごとに設定されており、他分科との交流は世話人の個人的な努力に頼っているのが実状です。多大の手間と経費をかけて約4千人の会員が一堂に会する機会を年2回も持つ以上、分野の壁を越えた交流を促進することが出来なければ、個々に行われる研究会と変わらないことになり、年会・分科会の存在意義が問われることにもなります。個別に他分野との交流を進めている世話人の方々の努力を支援する枠組みの必要性が高まっています。

なお、以上の問題とは別に、全体的な規模の増大のために、会場の確保が次第に難しくなっています。今のところ3年程度先までは目処がついており、その後についても大規模な大学にご協力いただくことができれば開催が不可能になる事態はしばらくは避けられるものと思われます。しかしながら、長期的には解決を要する問題であり、今回の再編とは独立に適切な対処法を模索していく予定です。

2. どのように分科会を変えるのか

こうした問題点の解消を図るために、分科に代えて、規模に極端な差のない部会を設置し、プログラム委員会で全体の調整を図るという提案をしました¹⁾。この提案に対する各分科からの意見を世話人懇談会で聞きしました。また、直接会員からも何件か意見が寄せられました。変更案の大枠には賛同が得られたものと思われませんが、研究分野の部会への分類方法についての意見が数多く出されました。このような状況を踏まえて、ワーキンググループは、前回提出した枠組みに沿って、次のような修正案を作成しました。基本的には前回の提案と同じです。修正点に重点を置いて説明します。

領域

秋の分科会の物性分科について、現在の分科に代えて「領域」を設置します。前回の提案では「部会」を設置することになっていましたが、部会という名前は各研究グループの利益を代表するニュアンスがあり、分野間の新たな壁を作ることになりかねないという懸念が寄せられたためです。領域の機能は、あくまでプログラム編成という技術的なものであり、固定化を防止するためにも固有の名称は付けずに番号で区別することにします。各領域は、一般講演申し込みの際に使用するキーワードを設定します。講演申し込み時に混乱を起こさないよう、キーワードは、当初、現在の分科名や細目分科名を基礎として設定しますが、研究の進展を反映して頻繁に更新します。現在の分科の世話人が、相当する領域の委員としてプログラムを編成します。

プログラム委員会

領域とは関わりなく会長から委嘱された委員、および各領域の代表が、プログラム委員会を構成します。プログラム委員会は、一般講演のプログラム編成に大きな矛盾がないかをチェックするとともに、各領域から招待講演（現在の特別講演を改称）とシンポジウムの提案の説明を受け、全体のバランスを考慮して実施する企画を最終決定します。なお、招待講演やシンポジウムは、会員が一定の書式にしたがって各領域に提案したものを、領域内であらかじめ検討して、その結果を領域の代表がプログラム委員会に提出します。

* 奥地斐男（和歌山高専、委員長）、伊藤厚子（お茶の水大理）、遠藤康夫（東北大理）、鈴木徹（都立大理）、西森秀彦（東工大理）、二宮正夫（京大基研）、松岡武夫（名大理）、福山秀敏（東大理）、若林信義（慶大理工）

領域の分類案
当初の領域編成として、次の表を提案します。領域番号、キーワード設定の基礎となる研究分野名、およびその原著講演件数（97年秋の分科会での講演件数から推測）を示します。

- 領域1 量子エレクトロニクス, 原子分子 (180)
- 領域2 プラズマ, 放電 (220)
- 領域3 磁性 (f 電子以外の現細目に相当する分野), 磁気共鳴 (390)
- 領域4 半導体, メゾスコピック系 (220)
- 領域5 光物性 (230)
- 領域6 金属, 液体, 準結晶, 量子液体・固体, 超伝導 (180)
- 領域7 分子性固体・有機導体 (180)
- 領域8 強相関係 (高温超伝導, f 電子系など) (480)
- 領域9 表面・界面, 結晶成長 (230)
- 領域10 誘電体, 格子欠陥, X 線粒子線, 放射線 (250)
- 領域11 統計力学, 非線形非平衡系, 流体力学 (430)
- 領域12 生物物理, 化学物理, 高分子・液晶, 統計力学 (200)
- 領域13 物理教育, 物理学史 (20)

各領域内で、講演申し込みの目安になるキーワードを必要に応じて設定します。最終的には領域で決定することになりますが、例えば領域8では次のような案が考えられます。対象、物質、手段の3つのカテゴリーを用意し、それぞれから適切なものを選ぶことにしてみました。

対象：高温超伝導, 金属 絶縁体転移, 磁性, 輸送現象,
低次元電子系, エネルギーバンド, 量子スピン系
物質：銅酸化物, 遷移金属酸化物, 遷移金属, 稀土類金属,
フクチナイド, 炭化物/脂化物, 化合物, 有機導体
手段：NMR, 中性子散乱, 分光, 電磁波測定, パルク物性
(伝導, 磁化測定, 熱測定), 音響効果, ドハース,
理論

3. 実施にむけて

99年秋からの実施に向けてさまざまな作業を進めていきます。今回の年会においても、インフォーマルミーティ

ープまでお知らせいただきます。並行して、各領域ごとに詳細なキーワードの案を作り、この秋の分科会の申し込みに際しに新方式のシミュレーションを実施することも計画しています。

今回の提案は、色々と問題点が目立つ秋の物性分科会を対象にしたものです。年会については、当面、現行方式で実施する予定です。素粒子・原子核・宇宙線分野においても、さまざまな可能性を議論していただき、ワーキンググループにご意見をお知らせくださるようお願いいたします。

年会・分科会が今回の変更だけで理想的なものになるわけではありませんが、従来の分科制より柔軟性の高い領域制の導入により、現状の抱える諸問題が緩和されるものと期待されます。今回の変更の成果を見極めつつ、今後ともさらに改善を重ねていく必要があるかと思われます。会員諸姉兄に年会・分科会の開催のあり方について引き続き関心を持って頂き、積極的にご意見を提案されるよう期待いたします。いずれにしても、この変更案の実施は、よりよい年会・分科会への出発点であると考えております^{2,3)}。

ご意見、ご希望は、4月末日までに下記へお寄せください。

電子メール：shomu@jps.or.jp

郵送：105-0011 東京都港区芝公園3-5-8

機械振興会館211号室

日本物理学会 年会・分科会係

文献

- 1) 年会・分科会検討ワーキンググループ：日本物理学会誌 52 (1997) 9月号別冊。
- 2) 小谷章雄：日本物理学会誌 50 (1995) 573, 遠藤康夫：同 574, 福山秀敏：同 657, 米沢富美子：同 52 (1997) 26, 佐藤勝彦他：同 211。
- 3) 佐藤勝彦：日本物理学会誌 53 (1998) 1。